

秋田大学

「講」から「協力会」へ—太平山三吉  
神社の信仰組織

秋田大学教育文化学部

呉柱賢

指導教員: 市嶋典子 先生

# 目次

序章	1
1. はじめに	1
第一章 信仰の発生と変遷	2
1-1 山岳信仰の定義	2
1-2 太平山信仰	3
1-3 三吉信仰	3
1-3-1 三吉に対する様々な伝承と権現	3
第二章 太平山三吉信仰の講社	7
2-1 講社の定義と展開	7
第三章 太平山信仰三吉信仰の活動	8
3-1 研究方法	8
3-2 太平山三吉講社のインタビュー	10
3-2-1 インタビューの協力者の紹介	10
3-2-2 太平山三吉神社とともに歩いた一生の話	10
第四章 結論	22
謝辞	24
参考資料（インタビュー内容の全体）	25
参考文献	34

## 序章

### 1. はじめに

日本の東北地域は多くの山地でなっている。ほとんどの山が神仏を祭り、祭祀を行う霊山だという。その中の一つが秋田県秋田市に位置する太平山である。現在、高い建物が無い秋田市内のところでは太平山が鮮明にみられる。昔、高層ビルがなかった頃は其の姿がどこらでも見えたはずだ。そのため、秋田市の居住者たちは太平山を霊山として祭り、今まで続いてきたと考える。役小角が太平山を修験道で開祖し、山の頂上に太平山三吉神社を建てたという伝承が存在する。それ来、本格的に太平山が秋田市のシンボルであると人々に受け入れられたその後、より訪ね行きやすいため、創建した秋田市内で一番大きい神社、太平山三吉神社総本宮という里宮がある。そこは太平山を基ついて三吉霊神を祭られている。

西海・時枝・久野（2014, pp106-109）によると、“近世期なかばに、太平山信仰は秋田（久保田）藩内の庶民の間に定着した。そして、文化文政年間（1804）には各村で太平山信仰の講が組織されるようになった。その伝統は現在も命脈を保っており、平成十一・十二年（1999・2000）の時点で、太平山三吉神社総本宮（奥宮・里宮）に定期的に参拝を行う講が八十五団体、同じく三吉神社総本古が十六団体存在した（合計百一団である。これらの約八割が秋田県内で組織された講であることから、太平山は、主に秋田県の人々が信仰を寄せる霊山だと言えよう。一つの太平山信仰の講社には約十五世帯が加入しており、一般に、戸主（男性）がその活動に参加することになっている”。

上の資料で分かる通り太平山三吉信仰は近代から始まり、現在まで参拝が行われている。そして、太平山三吉信仰を信じる人々が集まって一つの団体として活動する講社があるのが分かる。しかし、講社についての詳細は明らかにしていない。ここで気になる点は講社という団体の全体的な形態やどのような活動をしているのかという現在の実態である。そのため、講社の活動を通して何を目指しているのかについて考察する。加えて、一般に戸主（男性）が参加するという部分があるが、それでは女性は参加しなかったのか、今はどうなのか調査する。さらに、講社の共同目標や講社の組織（年齢代・性別比率など）、講社の影響について詳しく考察する。また、講社が個人の生活や人生にとってどんな意味を与えるのか。実に講社で活動している人の経験談を聞き明らかにする。また、他の信仰の講社に比較してみたが、太平山三吉信仰の講の方は情報が少ない。このように

上の資料の内容だけでは太平山三吉信仰の講社についての詳細は把握ができない。その理由はこの講社の規模が大きくなり、有名ではないためだと推測される。なぜ太平山三吉信仰の講社は他の講社より資料の比重がないのかその原因についても調査する。加えて、太平山三吉講社の活動を通じて構成員、個人はどのような影響を受けるのか、この講社の影響をインタビューから見つけるのがこの論文の究極的な目的である。

秋田市の人口は段々少なくなっていく。若い者がこの講に積極的に参加が行ってなればいずれ講社の活動も自然になくなってしまふかもしれない。ゆえに、現在の講社の実態を論文として明らかに残すことは意味がある作業だと考える。

## 第一章 信仰の発生と変遷

最初に、信仰の背景として太平山三吉信仰にかかわる伝承を見ながら考察する。信仰の発生と変遷を通じて講が何を大事にしているか、何を中心的に祈っているのかを見つけていくことができると思う。

### 1-1 山岳信仰の定義

宮家（2004, pp. 27-31）によると、“山岳は世界各地でその神秘的な崇高さゆえに神霊の居所として、また 天・太陽・雲・雷などの天体現象と結びつけて崇められた。さらにそれ自体や山岳内の木・池・岩石が崇拜の対象とされもした。今一方で異人、悪魔、精霊、魑魅魍魎の住む所として畏敬された。また、死後の他界、生児に付着する靈魂の原郷(生命の根源)、聖者が啓示を得た聖地、天国への道とされた。世界の中心、天と地を結ぶ柱、宇宙山、母なる山、曼荼羅とも捉えられている。山岳は修行、イニシエーション、死者儀礼、雨乞いや収穫の祈願、支配者による天神の祭祀が行なわれる場所でもあった。こうしたことから山頂・山腹・山麓などには、簡単な祭場や塚・寺・社・墓・祠などが作られている。参拝者や巡礼者が山岳やこれらの宗教施設を訪れることも多かった。山岳信仰は世界の諸宗教の中に種々の形で存在し、その重要な部分を占めてきた。特に日本では独自の発展を示し、修験道という山岳信仰を中核においた宗教すら誕生している”。

山岳信仰が世界あちこちにあるし、特に山が多い日本では山岳信仰を修験道とすることを中心に発展されたのを知る。修験道というのは昔から続いてきている。神様に祈ることを通して人々は生活の中で安定感をもらった。この内容を基に太平山の山岳信仰について述べる。太平山三吉信仰が最初は太平山信仰と三吉信仰で別れていたが、合併した。以下からは二つの信仰について考察した後、考察する。

## 1-2 太平山信仰

佐藤（1977, pp. 271-285）によると、“太平山はそのものが神である。神体山である。修行のため太平山にこもり、修行によって自ら神となった郷土の神である。1200年前、秋田市寺内に秋田城が設置されたころ、秋田城に駐在した中央官人は山岳信仰と方位を重視した。「東方薬師説」を根拠として、寺内高清水柵に官人達に太平山信仰が始まったとする説がある。高清水の丘からはまことによく太平山が遠望される。しかしそれはどのような形の信仰であったかはわからない。下って鎌倉期、鳥海山麓の矢島地帯に、大江氏が居住し、その一族が太平に移住して永井氏と名乗り、一帯を旧氏名にあやかって大江平と言ったが、それがなまって太平（おえだら）となったことは、江戸期の菅江真澄の「勝手能雄弓かつてのおゆみ」の説である。現在でも土地人は「おえだら」という。この説を一步延長すると、太平の山すなわち太平山となる”。

今私たちの社会の中、高く大きい建物は様々な役割をする。その代表的な例で、ランドマークということがある。国や都市の想像として高く大きい物を設定する場合が多い。例を挙げると、フランスの首都、パリといえばエッフェル塔であるし、アラブ首長国連邦の都市、ドバイといえばブルジュ・ハリファである。現代はこのような建築物があるが、昔は今より技術も足りなかつたし、人力でも限界があるため、自然にある山がその役割をしたと考える。そして、ある地域に一番高い山が空と近いので、神様と関連があると当時の人々は考えたのではないであろうか。

## 1-3 三吉信仰

### 1-3-1 三吉に対する様々な伝承と権現

滝沢（2009, p. 9-10）によると、“江戸女流文学者の只野真葛が著した『むかしばなし』で、「三吉鬼」は「見知らぬ男」と呼ばれている。酒屋で酒を飲んで、そのまま出ていこうとするが、そこで男に酒代を請求すると必ず災いに遭い、酒を捧げるとその何倍も与えてくれるという。

このような真葛の『むかしばなし』とほぼ同じ頃に成立したのが、菅江真澄の『月酒遠呂智泥』である。真澄によれば、太平山に住む「三吉」は「神鬼」であったという。当時、その姿を見かけた人がいたとも言い、真澄は、天狗などに類した「山鬼神」なのではないか推測している。「三吉」に関する目撃談は、『むかしばなし』よりもっと具体的だ。「一とせ仙北の群のなる外大伴の村のすまふとりして世を渡る雄」と目撃体験者が特定されている。そのエピソードを要約すると、次のとおりである。

三吉神に酒や桑を供えることでカシは力を得ており、力の神としての性格がうかがえる。一方、「三吉」の所在を尋ねられた人々が「神仙なればいつこともさだめがたし」と答えていることにも注目すると、神仙とは仙人、神を指す言葉であり、太平山村近の人々は三吉神が神仙であると認識していることになる。太平山三吉神社に保存されている棟札にも「仙人三吉権現」（1691年）と記されていることから、三吉神は元々仙人と考えられていたと推測できる。

『むかしばなし』と『月通遠呂智泥』を併せて考察すると、1600年代末から1700年代半ば頃までは三吉神は「仙人」として認識されていたと考えられる。しかしそれが何らかの原因で変化していき、「むかしばなし」の記述によると1700年代後半には「鬼」として語られることが多くなった。しかしただ恐れるべき「鬼」ではなく、災いをもたらす一方で恵みも与えてくれるという「鬼神」としての要素も読み取ることができる。当時、「神仙」（「仙人」とほぼ同義で使われていた）は山に住み神通力を持った不老不死の存在であると考えられ、「山の神」は農民にとって「田の神」でもあった。また、日本の「鬼」は多様な現れ方をしており姿を特定することは難しいが、境界を越えてやって来る異界の住人であるというイメージは広く持たれている。「鬼神」とは人々の災厄を除く鬼で、修験道や神道、陰陽道などの思想を色濃く受けている。「天狗」は室町時代に神格化され、天下動乱を予知するといった役割を担っていた。山伏と同一視されることも多い。

つまり、「神仙」は人間を超越する存在であり、「山の神」や「鬼神」は恵みをもたらしたり災いから守ってくれたりするものであった。「天狗」もまた、超

能力をもった存在として認識されていたと思われる。一方、「鬼」は悪いイメージを持たれることが多く、人々にとっては恐れるべき存在であった”。

すなわち、悪い行動をすれば鬼神が罰を与えるから、いつも言行を気を付けるようにするという話だと解釈される。現実的に鬼や神は存在しないが、昔の人々はこのような説話を通して、自分の言行や心を修することができたと見える。

ここからは三吉神が「鬼神」から「鬼」という要素が外れて、「神」へと変わりつつあった時代に書かれたと思われる伝承についてみる。

滝沢（2009, p. 11-12）によると、“『耳の垢』においては、三吉神が「山男」であると書かれている。山男は深山に住むという男の怪物を指し、鬼とほぼ同義で使われている。また、魚売りが籠に背負っていた魚をすべて食べ、その代金よりも多く金を与えたというエピソードからは、『むかしばなし』の三吉鬼と同様の性格を持っていることがわかる。この話の終わりには「唯三吉権現を唱へ、仙北の内処々にて社を建て祭る村々基だ多し。」とあり、仙北にある多くの村では社を建てて三吉神を祀っていると書かれている。『むかしばなし』や『月通達呂智泥』では、三吉神は願いを叶えてくれたり力を与えてくれたりする存在ではあったが、「神」として祀られる存在ではなかった。「耳の垢」では「山男」や「鬼」という性格がなくなり、「神」として認識されるようになったことが読み取れる。また、秋田藩だけでなく庄内藩（現在の山形県日本海沿岸部のあたり）まで伝わったことがうかがえる。太平山周辺のみならず、広い地域で三吉神が祀られ信仰されていたのだろう。

三吉神の信仰が広まったのは、おそらく 1800年代初めであると考えられるのだ。太平山三吉神社に残される棟札において、「仙人」が取れて純粹に「三吉大権現」の名が登場するのが 1806 年であることから、この頃には、「神」として語られるようになっていたのではないだろうか”。

ここで権現という用語が登場したので後で詳しく述べる。

時代が下がっていくとともに三吉神は「神」として認識がされる。江戸時代に書かれた文献としては、船遊亭扇橋の『奥のしをり』がその代表作でだという。滝沢（2009, p. 15）によると、“「奥のしをり」になると、三吉神の素性はかなり明確になってくる。久保田城下の茶町の商家の後家となった娘が、太平山の神「山鬼神大明神」と契った結果生まれた男子が「三吉」だというのである。母

の体内に15ヶ月もあって、生まれたときには既に歯が生え、2~3歳児の大きさがあつたという。このあたりは、弁慶の出生伝説などとも共通する、典型的な異類婚姻譚だ。男子が5歳の時、娘の母が亡くなり、その野辺送りを終えた後に、男子にその出生の秘密（自分が「太平山の神」と契って生まれた）を明かし、男子を連れて山に帰り、娘は山姥となり、男子(三吉)は山男となった、というのである。

『むかしばなし』や『月通達呂智配』では不明なままであつた出生躍が、この頃には加わつたことになる。同時に、三吉の「太平山の神」の子としての性格が明らかにされて性格が明らかにされている。これまで「鬼」「鬼神」「山男」であつた三吉に、「神」としての血筋が保証されたことになる”。

明治時代に書かれた文献で三吉神が登場する文献としては、近藤源八の『羽陰温故誌』があげられる。滝沢（2009, p.17-18）によると、“『奥のしをり』では三吉が太平山の神の子であるとされていたが、『羽陰温故誌』ではまったく異なる由来譚が作られている。この話では三吉神になつたのが太平城主大井鶴寿丸藤原ノ三吉になっている。本文には「一念ノ恨ミ鬼神ト変シテ」とあり、鬼神としての性格は継承されているが、明らかに「恨み」から崇る神としての性格を帯びている。そしてそれを祀ることで「神」へと変化している。また、神としての性格をみていくと、三吉神は勝利をもたらす神であるとされている。これも現在の太平山三吉神社の由来に書かれている、勝負の神としての三吉霊神の姿と似ている。『耳の垢』や『奥のしをり』に記されている神の性格と比較すると、この『羽陰温故誌』に記されている性格は明らかに違っている。前の2つについては、三吉神は靈験あらたかなる神として民衆から祀られる、庶民的な信仰であつたことがうかがえる。しかし、後者は災いを恐れた人々が怨念を鎮めるために祀り、さらには秋田藩主の佐竹公が勝利祈願のために三吉神を利用していることが続み取れる。話の内容に注目すると、『耳の垢』の延長に『奥のしをり』をみることはできるが、『羽陰温放誌』はそれらとは異なる系統にあるように思われる”。

時代をくださりながら、三吉霊神の姿が少しずつ変わつていった。このような現象があつたのは時代の変遷とともに人々のこだわりに合わせて神の姿も変わつていったことではないだろうかと考える。秋田藩主の佐竹公の話も、幕府から明治で時代が変わる時、様々な戦争があつて戦争に参加する人たちの意気込みを高めるためだとみえる。「佐竹公が勝利の神になってから秋田を守護してくれる。なので、私たちは負けない。」という信念を作るためではなかつたのか考えられる。



宮家（2004, pp. 156-165）によると、“このような権現というのは、日本各地の霊山に古来から祀られてた山の神がその山名などに権現号を付して呼ばれている。例えば熊野権現、蔵王権現、春日権現、白山権現、羽黒権現、彦山権現、箱根権現などがこれである。また東北の山伏神楽などでは山の神の化身とされる獅子面を権現様と呼んでいる。日本では八世紀前半頃から重用された「金光明最勝王経」に、如来の法身は常住で金剛のように不変だが衆生教済のためにかりの姿をあらわすとあることから平安中期（十世紀）頃から、僧侶や貴族の間でこの「権現」の語が用いられたとしている”。

ただ神様ではなく山の特徴を持つ名前を付け、神様の主体性が浮き上がるので、人々に神様という存在がより鮮明になったのではないであろうか。

## 第二章. 太平山三吉信仰の講社

### 2-1 講社の定義と展開

竹内（2007）によると、“「講」は「講経」、つまり「仏の教え（経典）」を説き明かすことで、やがてそのための「集り（講会）」をさすようにもなって、上代の宮廷や寺院では仁王講・最勝講・法華八講などの講行事が年々おこなわれてもきた。平安中期以後「浄土の教え」がおこって念仏修行がさかんになると、菩提講・迎講などの行事が多くなり、一方には念仏修行の同信者の仲間も増えて、やがて「講」は広く同じ信仰を持って協同行事をとり行う「仲間」の意味に振り替わっていった。そして室町期にくだると、こうした傾向はひろく民間一般にもゆきわたって、神仏を問わず、同じ信仰にむすばれて協同行事をとり行う仲間を「講」と呼ぶようになり、さらには信仰を離れた有志の団体まで、「講」の名をとることにもなった。「茶講」「将棋講」「汁講」、さては仲間金融の仕組の「頼母子講」「無尽講」、資材や労力の「助け合い」のための「茅講・屋根講」といった類いである。しかし講の・王体が「同信者の仲間」であることは久しく変わらず、旧くから東北各地にも伝統的な信仰仲間の「講」がいろいろあって、多彩な仲間行事をとりおこない、人々のくらしに「活力」を与える「よすが」ともなってきた”。

この資料で核心的なところといえば、講というのは同じ信仰を信じる人たちが共同の目標を目指すことだとみえる。そのため、太平山三吉信仰の講はどのよう

な共同の目標を目指しているのか、その目標のためにどのような活動をしているのか、様々な活動を通じて個人的に得るところは何かについて考察する。これらは講の人々とのインタビュー調査を通して明らかにする。

### 第三章. 太平山信仰三吉信仰の活動

#### 3-1 研究方法

太平山三吉信仰の講の構成員とのインタビュー調査を行う。インタビューの方法は半構造化インタビューで、ある程度質問を準備しておくが、必要によってはインタビューの流れに沿うようにする。インタビューは半構造化インタビューを行う。半構造化というはある程度質問項目を用意していても、直接的にそれを聞くことはせず、相手に自由に話させることで、その肉声を聞き取る方法である。インタビューの人数は1名であり、対面でのインタビューを予定していたが、コロナ禍のため、令和3年7月24日に電話インタビューを75分間行った。

事前に準備していたインタビューの質問項目は以下の通りである。

1. 太平山三吉神社の講社の構成員ですので、神社に時々行くと思います。神社に初めて行ったときはいつ頃ですか。
2. その時、神社の雰囲気とかはどうでしたか。
3. 以前と今の神社の様子や雰囲気など、変わったと思うことがありますか。
4. 講社に参加したきっかけは何ですか。そして、その時は何歳頃でしたか。
5. 講社に入った時、どんな気持ちでしたか。
6. 講社に入るのは何歳から可能ですか。
7. 今参加している講社は、こういった年齢層が多いんですか。全体的な年齢層はどうなっていますか。
8. (7番で若者の層が少なかったら、) どうして若者の参加率が低いと思いますか。
9. 若者の参加を望んでいますか。(＋はい／いいえの理由は何なのか)

10. 日本の霊山読み解き事典（西海賢二 2014 p.107）で太平山三吉講社の紹介がありました。この資料に関係していくつか伺いたいです。その資料には戸主だけ講に参加すると書いていましたが、家族と一緒に参加したことがありますか。

11. 戸主だけ参加する特別な理由がありますか。

12. 未婚者も参加していますか。

ーいいえー未婚者は参加しにくい環境ですか。

13. 資料では15世帯だと読みましたが、今はいくつの世帯が参加していますか。

ー15世帯より減ったり・増えたりの変化が見えれば、どうしてそうなったとおもいますか。

14. 資料で定期的な集まりがあると読みましたが、今もその通りですか。そして、何をしますか。

15. 資料では講社の人々の家を順番で回りながら集まると書いていましたが、今も同じですか。

16. 定期的な集まり以外に特別な行事や活動などがありますか。

ーあれば ①何がありますか。

②毎年参加したいですか。

17. 講社の活動の中で、「面白かった」「苦しかった」などの印象がとくに強く残っている活動があれば、教えていただけませんか？

18. 今までの人生で、個人的に大変だった時、神社や講が問題を克服するために役立ったという経験がありますか（心がけの変化など）。

19. 克服した後、神社や講社についてありがたい気持ちとかがありましたか。

20. 講員ではない周りの人(家族、友達、職場の同僚、近所の人など)に講社について話しますか。

21. 講社に入るためにはどのような方法がありますか。また新しく講員を広く募集していますか。

22. 他の地域の太平山三吉講社との交流がありますか。

23. 秋田県内の太平山三吉講社の分布の状態は資料が出ていますが、県外の資料は見つかりませんでした。県外の太平山三吉講社の存在を聞いたことがありますか。

24. これからは講社の活動がどのような風の流れだと思いますか。それとも、それに対する希望とかがありますか。

### 3-2 太平山三吉講社のインタビュー

#### 3-2-1 インタビューの協力者の紹介

A(仮名)さんは太平山三吉神社の氏子さんである。現在、70代後半の男性であり、太平山三吉神社の協力会の会長である。氏子として、協力会の会長として、今まで太平山三吉神社と一緒に過ごした話を聞かせてもらった。

#### 3-2-2 太平山三吉神社とともに歩いた一生の話

##### 【太平山三吉神社との縁は氏子から】

私: 神社に初めて行った時はいつ頃ですか。

Aさん: 生まれた時から、親に連れて行って。氏子です。

私: それでは、Aさんが幼い頃の神社の雰囲気や姿など、今まで覚えていることがありますか。

Aさん: 結構古い神社でしたね。建物は古かったです。まあ、今とあんまり変わってないですが、どこにもあるような普通の神社でした。境内は太平山神社と三吉神社という神様を祭るのが二つあったんです。それが昔の明治時代から途中に太平山三吉神社になったんです。ここの神様のご神体が太平山です。

福田アジオ・内山大介(2012, p. 208)によると、“氏子はその地域内に居住して氏神に守られる人たちである。氏神に対して生後一か月前後に宮参りをして氏子入りをする。現在一般化している七五三も氏神に子供のすこやかな成長を願うものであり、氏子入りの一種と言える。氏子になれば氏神の守護を受ける。それに対して奉仕の義務を負う。氏子は祭りに際して身を清め、供え物を備える”。

Aさんは太平山三吉神社の氏子さんであり、幼年期から今まで太平山三吉神社とずっと一緒であった。氏子になったので、その神社の歴史や状況を聞き見ながら自然に習得したことがうかがえる。太平山三吉講社にも参加するようになったきっかけは信仰が心の中に落ち着いたわけもあるし、氏子としてより神様のお手伝

いをするためだと考えられた。

Aさんは小さい頃と今の神社の姿はそんなに変わったことはないと答えた。ちなみに、このインタビューが終わった後、昔の神社の写真をメッセージファイルでAさんに見せてもらった。今の建物が若干規模が大きくなったと考えたが、Aさんが言った通り大きい変化がなかった。

#### 【太平山に登る行事から得るプライドと神社の建物の流れ】

Aさん: 元々の太平山三吉神社というのは、太平山の頂上にあっただんです。400年前に秋田の城主佐竹さんという人が秋田の城主だったんです。その佐竹さんがここに別荘を建てたんです。頂上には皆行くのが大変なので、佐竹の別荘の隣に神社の里宮を造ったんです。

私: あ、里宮は皆来られるので…。

Aさん: そう、昔は山頂のところだったら12時間もかかるから、皆行きづらい。(道路がなくて)車で行けないから、皆歩いていく。それで、町内で朝出発して夜頂上に到着。山頂の泊まるところで一泊した後、次の日朝に下山する。今も泊まる場所はある。里宮はここから400～500年前のことですから、頂上の神社は2千年も前のものですから。1500年前にそこにものを建てたという神社の札がある。別荘を建てると、「この物は安全でありますよ」という札を作るんです。その札が1400年ぐらい前のものが残っているので、1400年前は確実に神社があったというのをわかります。

太平山は険しい山だと知られている。今は整えられた登山路が山のあちこちにあるが、昔はそうではなかった。すなわち、気軽に登れる山ではないので、信者たちは皆集まって一緒に行った。このようなことは神社の一連の行事として行ったことがうかがえるし、このことを通じて神様のために険峻な山を登ったというプライドができ、自分が神道としてすることが役に立つ、そのようなことのために生きていくわけを発見したと考えられる。生きる意志を失った人にこのような行事は生きていく理由を探しに役に立つではないだろうか。

しかし、太平山三吉神社の信者といっても昔は丈夫な人、特に男性しか登れなかったもので、他の信者は憾みがあったことではないであろうか。だから、女性も老弱者も行きやすく里宮を建てたと考えられる。

つまり、太平山三吉神社が建てられた順は奥宮から佐竹さんの別荘、そして里宮である。太平山の頂上ある神社から里宮が造られたのは知っていたが、佐竹さんの別荘が里宮を建てる場所を決めることに影響を与えたのは新しい情報だった。

地理的に太平山が見えるなのはもちろん、城主という身分の人が選定した所の土地なので、その影響があったのではないであろうか。

#### 【協力会（前 警備委員会）活動から得る幸せ】

Aさん: 講というのは毎年順番に誰か、何人かが遠くの神社までお参り行くのが講。その人が帰ってくると、お参りして、感謝して、お願いして。私は今やってる講社は講という名前を使わないで、一番最初は太平山三吉神社警備委員会だったんですけど、人数が少なくなったので、改めて十数年前にそのメンバーの何人が太平山三吉神社協力会を作りました。警備委員会というのがちょっと合わないの、神社協力会という会を作ったんです。やることは同じです。私があなたの年のぐらいは神社が壊れ始めると神社を建てるために木材とかコンクリートとか、頂上に水がないので水とか泊まるための毛布とかは全部背負っていく。そういう協力をするのが協力会、警備委員会を作ってそんな活動をしてる会です。

講社はある神様を信じる人たちが集まった団体であり、一人が講の代表で神社に訪ね、お参りして戻る。この風習ができた訳は遠くところに住んでる人たちが皆来るのは無理であるし、健康がすぐれない人は行きづらいためだと予想される。

ここで、太平山三吉神社、本社で活発に活動している講の名前が協力会というのが分かった。そして、以前の名前は警備委員会であった。名前だけ変わった。活動していることは警備委員会の時と同じであった。

頂上にある神社を立て直すため、警備委員会（協力会）の部員としてやったことのエピソードを話した時、Aさんは大変であったが、とてもやりがいがあったような言い方であった。ここでうかがえるのは、協力会（前 警備委員会）の活動は神様のために奉仕することなので、活動する当時は身体的に苦しむことがあるが、その後、気が合って一緒に奉仕した部員たちとも親しくなるし、いい思い出に残ることである。このように、講の活動を通じて様々なやりがいと人脈を得るのではないであろうか。令和2年から続いていくコロナ禍のために人との繋がりが弱くなり、うつ病を訴えている人が増加している現在、ソーシャルディスタンスを守りながら協力会に参加すれば生活に活力が与えられ、コロナブルーを克服できると考える。

#### 【神社、抱えてくれる、暖かい場】

私: 協力会に参加した時、どんな気分でしたか。

Aさん: やっぱり神社の信仰でしょう。協力会を通して神様をお参りすると自分が安らかではないかという…。

私: 参加した時は何歳ぐらいでしたか。

Aさん: 中学2年生だから、14歳。普通に成年にならないと入れない。私は住んだところがこの周りなんで、ここが遊び場所だったんです。ここに同級生もいて、一緒に遊びました。  
(笑)

講に参加することで、神様をお参りすることから心の中で安を感じる。これは講が個人に与えるいい影響としての一つであろう。不安なことや大変なことがあって心が苦しい時、神様が自分を守ってくれる、乗り越えるように助けてくれるという希望があれば、どんなことがあっても克服できるのではないであろうか。

普通は青年になった後から講に参加できることを分かった。しかし、Aさんは中学生の時に講に参加した。Aさんは一般の信者ではなく氏子さんなので、その影響があったと考える。

神社はAさんに友達と集まる所、遊ぶ所であった。筆者はこの話から穏やかな雰囲気を感じた。このような思い出は氏子さんたちしか持たれないものと考えられる。今のAさんには太平山三吉神社が家のように暖かい場所ではなかったのかと予想される。

#### 【世代を合わせる協力会】

私: 大体年齢代はどうされていますか。

Aさん: 講に入るのは早くても40～50代。協力会は労働で神様を保護する会ですから20代からも結構います。協力会は20～80代までいますけど。戸主が退職する頃、講に入ったのが普通。それで、その戸主の子息も自然に信者になって協力会に参加する。だから昔は、家長、おじいさんからお父さんに、お父さんから息子が引継ぎされる。今も田舎の集落に行くとそういう形です。だから、親が入ってて子供も入ることは(今は)ほとんど珍しい。その息子が入ってまた新しい講を作る。

私: 新しい講ですか？

Aさん: お父さんのグループがそろそろお年になって、もう活動ができなくなって、若い人が3～15人ぐらい新しいグループになって、また一生懸命やろうとしたら新しい講で活動を続ける。普通は講の内での条件があるけど、協力会にはない。神様をお参りして奉仕する心があればそれで大丈夫です。

私：そうですね。そして、さっき協力会には若者もいるとおっしゃったんですが、若者の参加をより望んでいますか。

Aさん：協力会にはもう若者が多いんですね。年長者と若者の比率が半々ぐらいです。

私：あ、若者の参加率が高い方ですね。

Aさん：うん、高いです。昔からある集団の講は今は人数が少なくなってどんどん集まりも少なくなっています。

私：なるほど。昔、講には戸主だけ参加しなかったという資料を読みましたが、今も戸主だけでしょうか。

Aさん：いや、今はそんなことはないですね。昭和の初めぐらい、2次世界大戦前ぐらいまではそんな制限があったと思います。

私：今は性別に関係なく皆参加できますね。そうしたら、協力会の方はどうですか。

Aさん：協力会は戸主とか何も関係ないです。女性も男性も神様を崇敬して、愛して、神様のためにお手伝いをする会なんで、年齢別もないし、男女別もないし。

私：あ、じゃあ、未婚者とかも全然関係ないですね。

Aさん：協力会は関係ないです。

私：そうですね。また、講のことなんですけど、15世帯で構成されていると資料で出てきましたが、今はどのぐらいですか。

Aさん：講はね、何世帯とないね。

私：あ、ないですか。それでは、講はなくなってしまったんですか。

Aさん：正確には「講社」というね。講社はないわけではないけど、人数が少なくて活動があまりない。でも、まだ残っています。県内の講の人々は集まって旅行も行きますからまだ残っています。30～40人ぐらいはいるんじゃないかな。

講というのは一つの集団が続けていくのではなく、世代によってまた別のグループに派生するのが分かった。一般の講の場合は『日本の霊山読み解き事典』に書いてあった内容とほぼ同じであった。だが、違ったところは第一に、15世帯ではなく、30～40人ぐらいであったことである。第二に、戸主だけだという制限は近代以来、今はないということである。昔から続いてきた神社の文化、講社がどんどん少なくなって後はなくなってしまふかもしれないのは残念だが、日本の少子化や高齢化などの問題の上、田舎の方に人々が少なくなるのは仕方がないと考えられる。だからこそ、神社の方が講社の跡や歴史を記録したほうが良いと考えられる。



一般の講社の場合、年齢代が高い方であるが、協力会の場合は若者の参加率が予想より高かった。そして、講に参加することに特別な制限もない。しかし、【神社、抱えてくれる、暖かい場】の内容の通り、普通には成年になったから協力会に入るのが一般的なので、若者の中でも10代の方は少ないと予想する。協力会という講社に参加することとして、自分の世代に孤立されるのではなく、様々な年の人たちと奉仕しながら得ることが多いと考える。世代葛藤が深化されていく今の世の中では、このような団体に参加することとしてお互いに理解する・配慮する・助勢することができると思う。世代葛藤を和らげる一つの方法ではないであろうか。

【日本の内外に伸びている太平山三吉神社】

私：では、定期的な集まりがありますか。

Aさん：あります。皆集まって県内にも太平山三吉神社があちこちありますから色々な講が集まって、「皆、今回は何々ところの神社に参拝しに行こう。」みたいに。そういう集まりは今もやっています。だから講と講の繋がりがありますね。岩手県も青森県も山形県でも全部あります。どの程度の活動をしてるのは個々の神社でもはっきりしてないですけど。でも、いくつかの神社はそんな参拝をしています。県外からも行ったり来たりします。

私：県外の人たちも来ましたら他の地域にも太平山三吉神社があるということですか。

Aさん：太平山神社と言わなくて、ただ三吉神社というところはたくさんあります。東北と北海道と関東の上の方にも。そして、ブラジル。

私：あ、ブラジルにも！いろんなところに三吉神社がありますね。

Aさん：うん、北海道では個々の神社よりも大きい神社がある。分社だね。信仰している人がお金をもっと投資すれば神社が大きくなります。北海道になぜ一番規模が大きい神社があると言ったら、秋田県の皆が開墾のために北海道に渡ったんですよ。国の政策で。「北海道に行って開墾したら自分の土地になりますよ」と。それで秋田から行くんです。そうすると、開墾して畑を作ったり、田んぼを作ったりして開墾します。秋田県の人々がまとまって行くんです。秋田県の人々がグループになって仲良くするため。ただ「集まれ」と言ったら集まれなから、「あなたも、あなたも、あなたも秋田県の人だから、じゃあ、太平山三吉神社に行って神様にお参りして、お札をもらってここに分社を建てよう」と。

私：あ、そんなきっかけで北海道に分社が建てられたんですね。

Aさん：うん、それが順調に人が入ったところは(講の人から支援をもらって)神社が大きくなる。そして、ブラジルのことはね、ブラジルの人たちがここに数年に一回ぐらい参拝しに来る

し、この神社のおやじもブラジルに行ってくる。

私：ブラジルにもこの神社があるなんて、すごいですね。

太平山三吉神社の講社は秋田県以外にもたくさん存在する。太平山三吉神社の分社は秋田県以外、東北の山形県・宮城県・青森県・岩手県・福島県にもある。つまり、太平山は東北に位置するので、東北を中心に分布され、東北の近くの関東や北海道にも伸びて行ったと考えられる。北海道の分社は昔の秋田人が北海道に開墾しに行って、一緒に移住した秋田人たちとともに建てた。神社を建てた理由は、新しい居住の場で適応したりより円満な生活をするためには団結する媒体が必要だったと考えられる。秋田人たちはその媒体を地元の神様、太平山三吉神様で決めたのではないだろうか。ブラジルは北海道の例のように太平山三吉神社の信者がブラジルに移住した後、そこでも参るために造ったのではないであろうかと予想される。

講社は自分の神社だけで参拝することではなく、他の分社にも回りながら参拝しに行く。太平山三吉神社の一番規模が大きい分社は北海道にあり、秋田県秋田市に位置する本社より大きいそうである。信者たちの後援や支援があれば、規模が拡大される。規模が大きいほど、神社の合同行事などのイベントなどがある時、主軸になると考えられる。

#### 【講社で信仰心も連帯感も持っていく】

Aさん：講はあくまでも信仰だけであって、神社で何か行事があっても特別なお手伝いはなくて、ただ参拝だけ。協力会は何々神社に行事があると、支える力を仕事にする。そして信仰する。難しいけどね。講は頼れる神様の集まり、協力会は頼れる神様を労働で協力して神様に感謝する。

私：なるほど。両方とも理解できました。そうしたら、講のことなんですけど、人々が順番に回りながら家に集まって飲み会とかをしたという情報もありましたが、今もそうですか。

Aさん：うん、そうですね。講の人の中でも足が悪いとか、直接神社に行けない人達が集落に集まって、神社に行ってきた代表者メンバーが帰ったら一緒に食事して、その代表者は神社でもらってきたお札を配る。例えば、3人で講をやってる。二人が健康が悪くて神社に行けない。けど、残り一人は元気だから行ける。「じゃあ、私が3000円あげますので、お札をもらって私の分もちゃんとお参りしてください」と元気な人に頼む。その人が神社に行って名前を書いて代表してお金を払って。そうすると、神社ではお札をもらう。神社で帰ってきた代

表者が集落に入って、「皆、集まれー！」と言って、集まって皆でいっぱい飲みながら持ってきたのを皆に渡して。そういうのは今もやっています。

私：そんな感じですね。集まったら普通にどんな話をしますか。

Aさん：講ではまず、神様や神社の状況、後は自分の地元の農業とか、「今あなたの畑はどうだ、田んぼはどうだ」、そんな感じ。最後には孫の話かな。こんな一般的な話。

一般の講は参拝が主な活動であり、協力会は参拝以外にもボランティア的な性格をもっているように見えた。そして、一般の講の定期的な集まりは参拝のためにあるわけであった。秋田市の太平山三吉神社は、一般の講社より協力会の方が多様な活動をしているし、活動の頻度数も高いと予想できる。

Aさんが説明した一般の講社のシステムは効率的だと考える。もし、上の例のように都合がよくなく、神社に行かなくなれば、信仰心もますます薄くなる可能性もある。だが、自分が直接行くことではなくても、講社の中で行ける人に自分の分を頼んで、その人が代表で神社に行き、お札を伝達してくれることだけでも、神様や神社についての心が持続されるのではないであろうか。

田舎は年配者たちの孤立などが前から問題になっている。講の活動に参加すれば皆で一緒に食事したり話をしたりするので、孤立感も低くなり、同じ町の人たちとの連帯感も続いていけると考えられる。

#### 【個人主義から見る講社の変化】

私：そんな集まりには毎年参加しますか。

Aさん：やっぱり講の方はメンバーが変わりながらも、今残ってる講の方々は来てくれますね。

私：あ、状況によって違いますね。

Aさん：うん、そうそう。そして祭りとかする時も来る。梵天祭り。そうしたら、その人たちが(講の)代表で来る。

私：なるほど、他の地域からですね。

Aさん：うん、他の地域で。あ、梵天祭りの日には講社の人代表で来たり。昔、講がいっぱい活動した時は他の県でも観光バスで来る。祭りを見学したり、お参りするのために。私が若いころには、観光バスで大勢の人が来たけど。それがどんどん少なくなって。そして、コロナのためにもっとそうだね。まあ、これは今の話だけど。少なくなっちゃったのは事実ね。特に、最近はやりにくく入らないんじゃないですか。

私：どんな会にですか。

Aさん:例えば、山岳会とか団体ですること。だが、今は入る人が少ないです。皆、単独で行く方が多いから。こんな集まりがあんまりないんですね。特に、マンションとかに住んでると、隣の人をわからない。しかも、喧嘩したり。そんな時代じゃないんですか。

私:確かにそうですね。

Aさん:昔は、隣と隣の人たちと仲良くしないと生活がよくできないんじゃないですか。そう生活はできない時の講はずごく役に立つ。

講社は毎年参加することではなかった。個人の都合によって参加したりしなかったりするようだ。Aさんの話によると、昔は太平山三吉神社で開催する梵天祭りの際に他の地域の講社の大勢の人が訪ねてきた。だが、時代が変わり、個人主義が強くなってきた。そのため、何かする際は誰かと一緒にすることではなく、個人的に行う比率が高くなった。講社の状況も同じだそうである。講社の人数も少なくなって訪問客も昔ほど多くはない。さらに、令和2年から始まったコロナウイルスの拡散が激しくなり、人と人との集まりがますます無くなり、前より活動が沈滞していくことをうかがえる。

Aさんは今の社会の中、個人主義が強くなったことに対して残念な気持ちを持っているように聞こえた。【講社で信仰心も連帯感も持っていく】の内容でも言及したが、講社に入るのは周りの人と仲良くなれる方法の中、一つである。講社を通して集落の集団的な生活を円滑にできたと考えられるが、現在は昔に比べると少ないのは事実だと見える。

#### 【協力会、大変だったけど面白かった思い出に】

私:今まで活動しながら面白かったとか苦しかったとかなど、思い出の活動がありますか。

Aさん:講の活動では面白かったとかはあると思いますけど、苦しかった時はないですね。普通の講ではね。ただし、私がやってる協力会は面白かったとか、苦しかったとかがたくさんあります。山の登山路を作ったり、山の上の神社を建て直すなどの協力が一番重要ですから。登山路でも石山を登るときには、コンクリートや鉄棒をもって登って階段を造ったりすることもやりました。

私:へえー、直接山に階段を造るんですか。すごいですね。

Aさん:うん、だったよね。ただ面白いのは頂上に行ったら皆泊まって次の日に帰るから、皆食料品とか必要なものを持っていくんですよ。それで、上に行ったら皆で料理して食べたり、お酒を飲んだりする。それも講の一つの集まりだね。昔からの。何年前には留学生も協力

会のことを手伝ってくれました。

協力会はボランティア的な性格を持っているため、直接神社のために働く。なので、体力的に苦しかったと想像される。しかし、仕事が終わった後、お互いに気を合って働いた会員たちと食事や休憩をしながらやりがいを感じたではないだろうか。会員たちと一緒に「神様のために働く」という一つの目標を持ち、その状況の中で団結になり、仲間になる。講が個人に与える肯定的な影響だと見える。

【神様の恩のおかげで助けられた】

私：今まで、個人的に大変だった時に神社や協力会、もしくは講などのおかげで克服できたとかのことがありましたか。

Aさん：協力会の中では神社のためにやっていますから、全部そうなんですね。登山路も神社のためですから。

私：それでは、神社のためにしたことじゃなくて個人的に大変だったことではどうでしたか。例えば、生活の中でとか。

Aさん：それはいっぱいありましたね。

私：そんな時に神社や協力会のお陰で克服することに役に立ったことがもしあったら…。

Aさん：あ、そう、一番大きい自分が助かったこと。秋田は雪が多いですよ。そんな冬に神社で二泊とまったんですよ。その時4人がいたんですけど、行くときは山の途中に泊まって、次の日には天気良くて無事に頂上の神社に着いて参拝して。帰るときに突然天気が悪くなって登ってきた登山路が一切なくて、どこも何も見えなくて帰って来れない状況になったんですよ。山の頂上が陰しくて山に設置されている鎖を握って降りてくる。それ以外は少し歩きやすい道があるけど、雪が降るから探せなかったんです。4人で探していたんですけど、なかなか見つからなくて。だったけど、たまたま私の目の前のところが「パツ！」と晴れたんですよ。それで道路が見えたんです。その誰も見つからなかったが、私の目の前だけに見えて、「あ！皆ここに来い！」と、それで無事に皆で帰ってきたんです。それで命が助かったことがあります。

私：わあー、ドラマみたいな話ですね。奇跡だったんですね。

Aさん：うん、それが神様のお陰ではないかーと。これは若い時のことだよ。これは神様が助けてくれたと思う。あなたも帰る前に登ってみてもいい。神社で登山する人たちを募集して一緒に登山してくるから。女子登山会もある。昔は、近代時代(明治時代)前までは女性は

登山禁止だったんだよ。山そのもの自体がご神体だから。山に登れる場所がいくつかある。ここまでは女性が登ってもいいよという場所がある。今は全然構わないけど。

Aさんのこのエピソードは著者が聞いた間、没頭して聞き入り何となく緊張した。ほぼ遭難事故に近いと思われた。もし、著者があのような事故に遭うなら、すぐ挫折するのだと考えたが、Aさんは放棄せず、帰り道を探した。その理由は今まで神様を祭りながら蓄積された信心のお陰ではないであろうか。米国の哲学者及び心理学者のウィリアムは「考え方が変わると行動が変わり、行動が変わると習慣が変わり、習慣が変わると人格が変わり、人格が変わると運命が変わる」と言った。このように大変な状況の中でも神様を信じ、慌てない。だからこそ、挫折しなく克服しようとする円動力を持つようになったと考える。この点も講社が個人に与える影響の中で一つであろう。

#### 【一緒に、楽しく】

私：協力会以外の人にも講や協力会について話しますか。

Aさん：そうね、周りの人に協力会に入らないかと誘う。職場の仲間でも、遊びの仲間でも、他の宗教を持っていて神様がダメな人もいるから。だから誰でも誘うわけじゃなくて、その人が誘っても大丈夫かどうか分かった後に誘う。

私：誘われた人が本格的に加入するための手続きがありますか。

Aさん：ないね。協力会は他の宗教を持っていても大丈夫。けど、講はやっぱり神様を愛する人。

他宗教を持っていて協力会に入らない人ではなければ、Aさんは周りの人に協力会に参加してみないかと誘ってきたと語った。誘う対象は推測した通り、職場の同僚や友達、隣近所の人々であった。会員が増えたら、できる活動も多くなるし、より活発な会になる。もちろん、周りの人たちとも同じ神様を祭り、奉仕しながら共通点がもう一個できることで、紐帯が深くなると考える。

#### 【太平山三吉神社の本社と分社の繋がり】

私：他の地域の太平山三吉講との交流はさっきおっしゃった通りありますね。秋田県内の太平山三吉講の分布の資料はありますが、県外の資料は見つかりませんでした。それでは県外の方はさっきの通り北海道と東北6県、関東、ブラジルだと整理してもよろしいでしょ

うか。

Aさん:うん、そうね。そして、他の県の分社を持つようになれば、講を一步進んだもつと違う講というかね。普通はその分社を中心に活動する。だから、分社を持つためにはここで試験を受ける。それで、そこで造られた講はここ(秋田市の太平山三吉神社)に来ない場合もある。講によって違う。そして、そのまた自分の子息をここに送って勉強させて試験を受けるようにする。神社(分社)を継承するために。

私:あ、そうしたらあんまりここには来ることがないんですね。

Aさん:神社のために手伝いに来ますよ。交流はしますけど、毎年じゃなくて数年間に一回とか、大きいお祭りのときとか。ここで他の分社に行くこともあります。例えば、ほかの地域の分社で「50年記念の祭りをしますので来てください」みたいな案内状が来るときもあります。そんな時はここ本社でも出かけるんです。そんな繋がりもあります。

太平山三吉神社の分社を持つためには本社で勉強した後、試験を受ける必要がある。このような方式を基に、東北6県・北海道・関東・ブラジルまでに分社が建てられた。そして、分社を継承するため、神職は自分の子息にも同じ手続きを過ごすようにする。つまり、神職も代替わりする場合が普通だとうかがえる。

このように他の地域に建てられた分社との交流は毎年にかけてすることではなかった。必ず本社に大きな比重を置くのではなく、自分が属している神社を中心に活動するのが大きな理由と推測される。加えて、本社と他の地域の分社の間の距離的な問題のため、毎年定期的に通いながら交流することは難しいのもそのわけであろう。だからこそ、数年間に一回や大きい行事があるときだけ活性化されるとみえる。

【神様がきっかけになって、皆で仲良くしよう】

私:今までは講協力会の過去と現在のことを聞かせていただきました。この質問は未来のことですが、これからは講や協力会の活動の展望がどんな風になると思いますか。それに関する希望とかがもしありましたらお願いします。

Aさん:講はね、また少なくなると思います。協力会は大きくなると思います。講の方は今の社会だと、難しいね。

私:そうでしたら、協力会が大きくなりましたらどんな風にできたらいいと思いますか。

Aさん:太平山三吉神社を忘れなく行事とかに来てくれればいいと思います。

私:そうですね、忘れなく。最後で一言おっしゃりたいことがあればお願いいたします。

Aさん:うん、今は農業とかもね、田んぼもトラクターで全部して人と人の間に交流がなくなっちゃったね。寂しいけど、どんどん少なくなった。昔は田んぼもみんな手でやるから隣の人と仲良くしないと農業もできなくなったよ。何もできない。だからそういう繋がりでも集まったところで神様を崇拜する人がいるとそこで講に活性化するんですよ。でも今はそういう繋がりがないもんね。マンションに住んだらもっとそうだし。昔みたいに神様を頼んで「皆太平山三吉神社に連れて行こう」と。

Aさんは一般の講社は少なくなっていくと予測した。集落の人数が少なくなっているのが原因だと見える。その反面、現在一番活性化されている協力会は今より規模が大きくなると答えた。そして、太平山三吉神社を忘れなく絶え間ない参加を通じて協力会を継承して行ってほしいのをうかがえた。このような講社は神社の歴史の中でも比重がある部分だと考える。講社の構成員たちが神社のことに責任と信仰心も持って働くため、神社が発展する。講社は神社にとって重要な存在ではないであろうか。

講社という団体の中で得られる暖かい人間関係は申し分ないものだと考える。Aさんも昔のように皆で仲良くするのがどのぐらい良いものなのかわかっているから、今の個人主義的な世の中に残念な気持ちをもう一回表したと考えられる。なぜなら、世の中は一人で生き抜くことではなく、お互いに手伝いながら住んでいくのである。つまり、神様をきっかけに周りの人と仲良くされてほしいと見えた。

#### 第四章 結論

今まで秋田市の太平山三吉神社の歴史や神様の伝承などを簡単に確認した後、神社の講社について調査した。「はじめに」で言及した疑問にインタビューに基づいて答えをまとめ、著者の考察を付ける。

まず、講という団体の全体的な形態と活動の内容、現在の実態である。インタビューを通して分かるように、一番大きい点は太平山三吉神社には一般の講と協力会があるということである。すなわち、別の講社である。そして、講社というのは一つの集団が継承していくのだと考えたが、世代によってまた別のグループに派生することを分かるようになった。協力会も講社の種類の中の一つであるが、太平山三吉神社の一般的な講社とは性格が違った。一般の講社は全般的にお参り



が目標であるが、協力会はお参り以外も、神様と神社のために様々なお手伝いをする、ボランティア的な性格が浮かべていた。つまり、協力会の主な目標は自分が祭る神様から恩を感じているので、それに対する「恩返しをする」ことだと考えられる。

講は年齢代が高い方で段々その規模が少なくなっていく反面、協力会は講より年齢代も幅広いし、若者の参加率が高い。だから、「はじめに」で講社が段々なくなってしまうのではないであろうかという推測は、一般の講社は当たる可能性が高いが、協力会は反対に大きくなると展望する。そして、どうして講社に対する資料が不足なのかという疑問に講社の規模が小さいためだと予想したが、それではないと考えられる。規模がもう大きいのに資料が少ない原因は、地域社会に講社、特に協力会などを直接に広報するのではなく、知り合いを通して参加するためだと考える。

太平山三吉神社の講社の分布資料は秋田県内の資料しか見つかりなかったもので、秋田県外にはないのかという事項も調べた。その結果、県外の太平山三吉神社の分社がある地域は東北の青森県、岩手県、山形県、宮城県、福島県と北海道、そして関東地方の北の方の一部、海外にはブラジルにあるということが分かった。一番大きい分社は北海道に位置する。分社がある所には講社も絶対的に存在するので、秋田県外には言及した地域に講社があると考えられる。そして、昔の秋田人が北海道に開墾しに行き、建てた分社が一番規模が大きい神社である。神社が大きくなるためには大勢の支援、資本が必要である。その大勢の人は大体信者たち、講社の人々の可能性が高いので、北海道の講社の種類や人数が多いではないかと予想する。だが、講社は自分の神社を中心に行われるので、本社の講社と分社の講社間の交流は数年間にかけて一年ぐらいだった。以前は講社の人数が多くて活発に活動したが、今はそのぐらいではないと考えられる。ちなみに、令和2年からはコロナウイルスの拡大の原因でより活動の数が少なくなった。

一般の講に入るためには講によって手続きが違うが、昔より厳しくないようである。今も戸主だけ入れられないのかという疑問については、現在はそうではないことが分かった。制限がある方より、今のように信仰があれば誰でも入れる方が講社がなくなってしまう時期を少しでも延ばすのではないであろうか。協力会の場合は草創期から年齢や性別、宗教などに関係なかった。太平山三吉神様をお手伝いしたい気があれば誰でも参加できる。

著者がインタビューの内容を基に考える講社、特に協力会の活動が個人に与える点は大きく三つがあると考えます。第一に、講に参加して神様にお参りすることとして、気が休まる。第二に、講に入ることを通して集落の周りの人達と仲良くすることができる。そして、多様な世代の人々と活動しながら世代葛藤を緩和するきっかけになる。第三に、苦しい状況の中でも神様を信じることとして挫折しなく、克服する原動力を持つようになる。

この研究を行いながら惜しかった点はインタビューをする中に予想しなかった別の講、協力会が登場して慌てたところである。一般の講と協力会を分けて質問すれば、よりはっきり整理ができたと考えます。誰かをインタビューすることが初めてで、新しいことが出てくるのを適切に瞬発力を発揮されなくて残念であった。けれども、インタビューのAさんが両方とも詳しく説明してくれて順調にインタビューを完了した。

秋田県秋田市に位置する太平山三吉神社で、今一番目に見えるように活動している講は協力会である。しかし、上で述べたように世代によって講は新しく派生されたり消滅されたりする。つまり、活発に活動する講が時代に沿って交替される。以後の課題としては数年の後は協力会の状態はどのようになったのか。人数や年齢代、活動の頻度、変化などを明らかにすることである。そして、また新しい講が出来れば、協力会と比較し、どのような点が違ってどのような点が似ているのかなど、新しい講社を研究することで太平山三吉神社の講社の歴史を整理する貴重な資料になると考える。

## 謝辞

お忙しいところインタビューに応じて頂き、誠にありがとうございます。また、コロナ禍のために対面の研究活動が禁止になり、直接お目にかかって挨拶できなく、恐縮でした。外国人の私が理解しやすくわざわざ優しい単語を選んで話して頂いたり複雑な内容は詳しく説明頂いたり、配慮に感謝いたします。後、Aさんに連絡が届けるように助力頂いたAさんの奥さんにも厚く御礼を申し上げます。

## 参考資料(インタビュー内容の全体)

\* 対話の生動感のために文章を省略や整えなく話したまま述べました。

私：神社に初めて行ったときはいつ頃ですか。

Aさん：生まれた時から、親に連れて行って。

私：氏子さんですか。

Aさん：そうそう。

私：それでは、Aさんが幼い時の神社の雰囲気や姿など、今まで覚えていることがありますか。

Aさん：結構古い神社でしたね。建物は古かったです。ま、今とあんまり変わってないですが、どこにもあるような普通の神社でした。境内は太平山神社と三吉神社という神様を祭るのが二つあったんです。それが昔の明治時代から途中で太平山三吉神社になったんです。ここの神様のご神体が太平山です。

私：つまり、太平山が…。

Aさん：うん、山がご神体です。元々の太平山三吉神社というのは、太平山の頂上にあっただけです。400年前に秋田の城主佐竹さんという人が秋田の城主だったんです。その佐竹さんがここに別荘を建てたんです。頂上には皆行くのが大変なので、ここ（佐竹の別荘の隣）に神社の里宮を作ったんです。

私：あ、ここ（里宮）は皆来られるので…。

Aさん：そう、昔は山頂のところだったら12時間もかかるから、皆行きづらい。車で行けないから、皆歩いていく。それで、町内で朝出発して夜頂上に到着。山頂の泊まるところで一泊した後、次の日朝に下山する。今も泊まる場所はある。

私：つまり、山頂にある神社が初めて建てられ、ここに佐竹さんの別荘の後に里宮が作られたんですね。

Aさん：そうそう、里宮はここから400～500年前のことですから、頂上の神社は2千年も前のことですから。1500年前にそこにもものを建てたという神社の札がある。別荘を建てると、この物は安全でありますよという札を作るんです。その札が1400年ぐらい前のものが残っているので、1400年前は確実に神社があったというのを

わかります。

私：そうですね、それでは講に参加するようになったきっかけはやはり氏子さん  
ですの…。

Aさん：そう、氏子だから。私たちは講というよりも氏子なんですよ。氏子のほう  
がもっと上なんです。講というのは調べたんでしょう？

私：はい、調べました。

Aさん：じゃあ、わかってるね。講というのは毎年順番に誰か、何人かが遠くの神  
社までお参り行くのが講。その人が帰ってくると、お参りして、感謝して、お願  
いして。ここの神社を信仰する人は東北6県、関東一部、北海道、一番遠いところ  
がブラジル。そこに皆何々講社という集まり会がある。私は今やってる講社は講  
という名前を使わないで、一番最初は太平山三吉神社けいびん会だったんですけ  
ど、人数が少なくなったので、改めて十数年前にそのメンバー何人が太平山三吉  
神社協力会を作りました。警備委員会というのがちょっと合わないの、神社協  
力会という会を作ったんです。やってることは同じです。私があなたの年のぐら  
いは神社が壊れ始めると神社を建てるために木材とかコンクリートとか、頂上に  
水がないので水とか泊まるための毛布とかは全部背負っていく。そういう協力を  
するのが協力会、警備委員会を作ってそんな活動をしてる会です。

私：神社のために活動する警備委員会が名前だけ協力会で変わったということ  
ですか。

Aさん：そう、協力会ね。

私：協力会に参加した時、どんな気分でしたか。

Aさん：やっぱり神社の信仰でしょう。神様をお参りすると自分が安ではないか  
という…。協力会を通して。

私：参加した時は何歳ぐらいでしたか。

Aさん：中学2年生だから、14歳。普通に成年にならないとはいられない。私は住  
むところがこの周りなんで、ここが遊び場所だったんです。ここに同級生もい  
て一緒に…。

私：大体年齢代はどうされますか。

Aさん：講に入るのは早くても40～50代。協力会は労働で神様を保護する会ですから20代からも結構います。協力会は20～80代までいますけど。戸主が退職するごろ、講に入ったのが普通。それで、その戸主の子息も自然に神道になって協力会に参加する。だから昔は、家長、おじいさんからお父さんに、お父さんから息子が引継ぎされる。今も田舎の集落に行くとそういう形です。だから、親が入って子供も入ることは（今は）ほとんど珍しい。その息子が入ってまた新しい講を作る。

私：新しい講ですか？

Aさん：お父さんのグループがそろそろお年になって、もう活動ができなくなって、若い人が3～15人ぐらい新しいグループになって、また一生懸命やろうとしたら新しい講で活動続ける。

私：あ、別のグループですね。

Aさん：そうそう、普通は講の内での条件があるけど、ここ（協力会）にはない。神様をお参りして奉仕する心があればそれで大丈夫です。

私：そうですね。そして、さっき協力会には若者もいるとおっしゃったんですが、若者の参加をより望んでいますか。

Aさん：協力会にはもう若者が多いんですね。年長者と若者の比率が半々ぐらいです。

私：あ、若者の参加率が高い方ですね。

Aさん：うん、高いです。昔からある集団の講は今は人数が少なくなってどんどん集まりも少なくなっています。

私：なるほど。昔、講には戸主だけ参加しなかったという資料を読みましたが、今も戸主だけでしょうか。

Aさん：いや、今はそんなことないですね。昭和のはじめぐらい、2次世界大戦前ぐらいまではそんな制限があったと思います。

私：今は性別に関係なく皆参加できますね。そうしたら、協力会の方はどうですか。

Aさん：協力会は戸主とか何も関係ないです。女性も男性も神様を崇敬して、愛し

て、神様のためにお手伝いをする会なんで、年齢別もないし、男女別もないし。

私：あ、じゃあ、未婚者とかも全然関係ないですね。

Aさん：協力会は関係ないです。

私：そうですね。また、講のことなんですけど、15世帯で構成されていると資料で出てきましたが、今はどのぐらいですか。

Aさん：講はね、何世帯とないね。

私：あ、ないですか。それでは、講はなくなってしまったんですか。

Aさん：正確には「講社」というね。講社はないわけではないけど、人数が少なくて活動があんまり…。でも、まだ残っています。県内の講の人々は集まって旅行も行きますからまだ残っています。30～40ぐらいはいるんじゃないかな。

私：30～40世帯ですか。

Aさん：いや、世帯じゃなくて人が。

私：あ、人数が30～40世帯ですね。では、定期的な集まりがありますか。

Aさん：あります。皆集まって県内にも太平山三吉神社があちこちありますから色々な講が集まって、「皆今回は何々ところの神社に参拝しに行こう。」みたいに。そういう集まりは今もやっています。だから講と講の繋がりがありますね。

私：あちこちの神社は県内の方ですか。

Aさん：ここでやってるのは県内ですけど、岩手県も青森県も山形県でも全部あります。どの程度の活動をしてるのは個々の神社でもはっきりしてないですけど。でも、いくつかの神社はそんな参拝をしています。

私：あ、県内で…。

Aさん：県外からも行ったり来たりします。

私：県外の人たちも来ましたら他の地域にも太平山三吉神社があるということですか。

Aさん：太平山神社と言わなくて、ただ三吉神社というところはたくさんあります。

私：あ、全国に…。

Aさん：全国じゃなくて、東北と北海道と関東の上の方にも。そして、ブラジル。

私：あ、ブラジルにも！いろんなところに三吉神社がありますね。

Aさん：うん、北海道では個々の神社よりも大きい神社がある。分社だね。信仰している人がお金をもっと投資すれば神社が大きくなります。北海道になぜ一番規模が大きい神社があると言ったら、秋田県の皆が開墾のために北海道に渡ったんですよ。国の政策で。「北海道に行って開墾したら自分の土地になりますよ」と。

私：あ、自分の土地になりますね。

Aさん：うん、それで秋田から行くんです。そうすると、開墾して畑を作ったり、田んぼを作ったりして開墾します。秋田県の人々がまとまって行くんです。秋田県の人々がグループになって仲良くするため。ただ‘集まれ’と言ったらあ集まらないから、‘あなたも、あなたも、あなたも秋田県の人だから、じゃあ、太平山三吉神社に行って神様にお参りして、お札をもらってここに分社を建てよう。’と。

私：あ、そんなきっかけで北海道に分社が建てられたんですね。

Aさん：うん、それでそれが講なんです。

私：なるほど。

Aさん：うん、それが順調に人が入ったところは（講の人から支援をもらって）神社が大きくなる。

私：つまり、北海道に分社を初めて作った人は秋田人ですね。

Aさん：そうそう。そして、ブラジルのことはね、ブラジルの人たちがここに数年に一回ぐらい参拝しに来るし、ここの神社のおやじもブラジルに行ってくる。

私：ブラジルにもこの神社があるなんて、すごいですね。そして、昔の講、今は協力会のことなんですけど…。

Aさん：あ、講は昔も今もあるよ。今一番目に見えるように活動するのが協力会。講は講でちゃんとやってる。

私：あ、そうですね。すみません。講と協力会、どちらを質問したらいいのか、今頭の中で混ざってしまっていて…。

Aさん：講はあくまでも信仰だけであって神社で何か行事があっても特別なお手伝いはなくて、ただ参拝だけ。協力会は何々神社に行事があると、支える力を仕事にする。そして信仰する。難しいけどね。講は頼れる神様の集まり、協力会は頼れる神様を労働で協力して神様に感謝する。

私：なるほど。両方とも理解できました。そうしたら、講のことなんですけど、人々が順番に回りながら家に集まって飲み会とかをしたという情報もありましたが、今もそうですか。

Aさん：うん、そうですね。講の人の中でも足が悪いとか、直接神社に行けない人達が集落に集まって、神社に行ってきた代表者メンバーが帰ったら一緒に食事して、その代表者は神社でもらってきたお札を配る。例えば、3人で講をやってる。二人が健康が悪くて神社に行けない。けど、残り一人は元気だからいける。‘じゃあ、私が3000円あげますので、お札をもらって私の分もちゃんとお参りしてください’と元気な人に頼む。その人が神社に行って名前を書いて代表してお金を払って。そうすると、神社ではお札を（もらう）。それをその代表者が集落に入って、‘皆あつまれ’と言って、集まって皆でいっぱい飲みながら持ってきたのを皆に渡して。そういうのは今もやっています。

私：そんな感じですね。集まったら普通にどんな話をしますか。

Aさん：講ではまず、神様の状況、神社の状況、後は自分の地元の農業とか、‘今あなたの畑はどうだ、田んぼはどうだ’、そんな感じ。最後には孫の話かな。こんな一般的な話。

私：そんな集まりには毎年参加しますかね。

Aさん：やっぱり講の方はメンバーが変わりながらも、今残ってる講の方々は来てくれますね。

私：あ、状況によって違いますね。

Aさん：うん、そうそう。そして祭りとかする時も来る。梵天祭り。そうしたらその人たちが（講の）代表でくる。

私：なるほど、他の地域からですね。

Aさん：うん、他の地域で。あ、梵天祭りの日には講社の人代表で来たり。昔、



講がいっぱい活動した時は他の県でも観光バスで来る。祭りを見学したり、お参りするために。私が若いころには観光バスで大勢の人が来たけどね。それがどんどん少なくなって。そして、コロナのためにもっとそうだね。ま、これは今の話だけど。少なくなっちゃったのは事実ね。特に、最近は会によく入らないんじゃないですか。

私：どんな会にですか。

Aさん：例えば、山に登る会、山岳会とか。けど、今は皆は入らない。皆単独で行く方が多いから。こんな集まりがあんまりないんですね。特に、マンションとかに住んでると、隣の人をわからない。そんな時代じゃないんですか。

私：確かにそうですね。

Aさん：昔は、隣と隣の人たちと仲良くしないと生活がよくできないんじゃないですか。そう生活はできない時の講はすごく役に立つ。

私：講に入ることを通して皆と仲良くすることができるということですね。今まで活動しながら面白かったとか苦しかったとかなど、思い出の活動がありますか。

Aさん：講の活動では面白かったとかはあると思いますが、苦しかった時はないですね。普通の講ではね。ただし、私がやってる協力会は、警備委員会は面白かったとか、苦しかったとかがたくさんあります。山の登山路を作ったり、山の上の神社を建て直すなどの協力が一番ですから。登山路でも石山を登るときには、コンクリートや鉄棒をもって登って階段を造ったりすることもやりました。

私：へえー、直接山に階段を造るんですか。すごいですね。

Aさん：うん、だったよね。ただ面白いのは頂上に行ったら皆泊まって次の日に帰るから、皆食料品とか必要なものを持っていくんですよ。それで、上に行ったら皆で料理して食べたり、お酒を飲んだりする。それも講の一つの集まりだね。昔からの。何年前には留学生も協力会のことを手伝ってくれました。

私：なるほど、楽しかった思い出ですね。そして留学生も参加できますし。今まで、個人的に大変だった時に神社や協力会、もしくは講などのお陰で克服できたとかのことがありましたか。

Aさん：協力会のなかでは神社のためにやっていますから、全部そうなんですね。登

山路も神社のためですから。

私：それでは、神社のためにしたことじゃなくて個人的に大変だったことではどうでしたか。例えば、生活の中でとか。

Aさん：それはいっぱいありましたね。

私：そんな時に神社や協力会のお陰で克服することに役に立ったことがもしありましたら…。

Aさん：あ、そう、一番大きい自分が助かったこと。秋田は雪が多いですよ。そんな冬に神社で二泊とまったんです。その時4人がいたんですけど、行くときは山の途中に泊まって、次の日には天気良くて無事に頂上の神社に着いて参拝して。帰るときに突然天気が悪くなって登ってきた登山路が一切なくて、どこも何も見えなくて帰って来れない状況になったんです。山の頂上が険しくて山に設置されている鎖を握って降りてくる。それ以外は少し歩きやすい道があるけど、雪が降るから探せなかったんです。4人で探していたんですけど、なかなか見つからなくて。だったけど、たまたま私の目の前のところがパッ！と晴れたんですよ。それで道路が見えたんです。そこの誰も見つからなかったが、私の目の前だけに見えて、‘あ！皆ここに来い！’と、それで無事に皆で帰ってきたんです。それで命が助かったことがあります。

私：わぁー、ドラマみたいな話ですね。奇跡だったんですね。

Aさん：うん、それが神様のお陰ではないかと。これは若い時のことだよ。神様が助けてくれたと思う。あなたも帰る前に登ってみてもいい。神社で登山する人たちを募集して一緒に登山してくるから。女子登山会もある。昔は、近代時代（明治時代）前までは女性は登山禁止だったよ。山そのもの自体がご神体だから。山に登れる場所がいくつかある。ここまでは女性が登ってもいいよという場所がある。今は全然構わないけど。

私：そうですね。帰る前に都合がよかったら是非登ってみたいです。それでは、協力会以外の人にも講や協力会について話しますか。

Aさん：そうね、周りの人に協力会に入らないかと誘うね。職場の仲間でも、遊びの仲間でも。でも、他の宗教を持っていて神様がダメな人もいるね。だから誰でも誘うわけじゃなくて、その人が誘っても大丈夫かどうか分かった後に誘う。

私：誘われた人が本格的に加入するための手続きがありますか。

Aさん：ないね。協力会は他の宗教を持っていても大丈夫。けど、講はやっぱり神様を愛する人。

私：他の地域の太平山三吉講との交流はさっきおっしゃった通りありますね。秋田県内の太平山三吉講の分布の資料はありますが、県外の資料は見つかりませんでした。それでは県外の方はさっきの通り北海道と東北6県、関東、ブラジルだと整理してもよろしいでしょうか。

Aさん：うん、そうね。そして、他の県に分社を持つようになれば、講を一步進んだもって違う講というかね。普通はその分社を中心に活動する。だから、分社を持つためにはここで試験を受ける。それで、そこで造られた講はここに来ない場合もある。講によって違う。そして、そのまた自分の子息をここに送って勉強させて試験を受けるようにする。神社（分社）を継承するために。

私：あ、そうしたらあんまりここには来ることがないんですね。

Aさん：神社のために手伝いに来ますよ。交流はしますけど、毎年じゃなくて数年間に一回とか、大きいお祭りのときとか。ここで他の分社に行くこともあります。例えば、他の地域の分社で「50年記念の祭りをしますので来てください」みたいな案内状が来る時もあります。そんな時はここ本社でも出かけるんです。そんな繋がりもあります。

私：今までは講協力会の過去と現在のことを聞かせていただきました。この質問は未来のことですが、これからは講や協力会の活動の展望、どんな風になると思いますか。それに関する希望とかがもしありましたらお願いします。

Aさん：講はね、また少なくなると思います。協力会は大きくなると思います。講の方は今の社会だと、難しいね。

私：そうでしたら、協力会が大きくなりましたらどんな風にできたらいいと思いますか。

Aさん：太平山三吉神社を忘れなく行事とかに来てくれればいいと思います。

私：そうですね、忘れなく。最後で一言おっしゃりたいことがあればお願いいたします。

Aさん：うん、今は農業とかもね、田んぼもトラクターで全部して人と人の間に交流がなくなっちゃたね。寂しいけど、どんどん少なくなった。昔は田んぼも皆手でやるから隣の人と仲良くしないと農業もできなつたよ。何もできない。だからそういう繋がり集まったところで神様を崇拝する人がいると、そこで講に活性化するんですよ。でも今はそういう繋がりがないもんね。マンションに住んだらもっとそうだし。昔みたいに神様を頼るで「皆太平山三吉神社に連れて行こう」と。

私：つまり、神様をきっかけで皆仲良くなつたらいいと思いますね。

Aさん：そうそう。

## 参考文献

- [1] 内山大介（2012）「民俗信仰」福田アジオ・内山大介・鈴木英恵・内山大介・吉村風・萩谷良太（編）『図解案内 日本の民俗』（p. 208）吉川弘文館
- [2] 佐藤久治（1977）「太平山信仰と在地修験」月光善弘（編）『山岳宗教史研究叢書 七 東北霊山と修験道』（pp. 271-285）名著出版
- [3] 滝沢宏実（2009）『三吉信仰と伝承』秋田大学教育文化学部国際文化言語課程卒業論文
- [4] 竹内利美「講の展開と代参講」（「東北物語Web伝承館」<https://web.archive.org/web/20071023153552/http://www.kurikomanosato.jp/00x-10-28tt-kou.htm>より取得、2021年6月17日）
- [5] 西海賢二・時枝務・久野俊彦（2014）『日本の霊山読み解き事典』（p. 106-109）柏書房
- [6] 宮家準（2004）『霊山と日本人』日本放送出版協会